

坐に先だって

ここにこうして道のために集まられた皆さん、好時節ですから一層坐にいそしみやすく心境も進むはずです。

初めてお見えになられた方々に申し上げておきます。

坐禅は何のためにするのかというテーマが最初に浮かび上がる筈です。生涯の全体が有るからです。つまり生死を初め煩惱妄想も葛藤も苦しみも、総て心の問題だからです。生涯と言えは漠とした言い方ですが、一日々々の生活が人生その物です。この一個の身体と得体の知れない心を通して、今と言う時の流転、無常の働きのことです。言葉を換えれば環境に応じて機能し作用している事です。環境とは縁と言う事です。場所や位置や時間や思惑も含めた人と物と言うことです。これらの集積体がこの世界であり今の姿です。

個々という観点に立てば今の姿が無限に存在すると言う事です。それに依じて機能しますから、私達の姿もまた無限に現れると言う事です。つまり無限の自己ということです。それは私達が自由な存在だと言う事です。ここが大切なところです。本来が諸行無常です。縁に従って自由自在に活動して止まない世界です。それを好き嫌いとか、思想などと言って固定的に認めて執着すれば、総てが滞るために内外が混沌とし惑乱して争乱となるのです。

今も昔も世界が絶えず騒然として治まらないのは、この自然である根本的な道に叶っていないからです。道が分からなければ、それぞれが自分の思いでするしかありません。当然勝手に理屈を起てて正当化したり、己の利を計ることになるのです。即ち、個たらしめている自意識を強調すると、本来の動物的な思考系が強烈に作用し、自己主張に力が入ってしまうという構造をしているのです。そうしますと他の人もそうですから他と対立するのです。動物人間としての知的構造から脱出できないと言う事はそういう事なのです。これが諸問題を起こすのです。と言う事はいちゝゝの見聞覚知に囚われて心が勝手に離合集散し感情を刺激し続けて迷うのです。だから不安や悲しみや葛藤の苦しみからは離れられないのです。

こうした人間の哀れにして愚かな姿が現実に存在しているのは何故かと言う事です。それは人間の特性である極度に発達した知性によるものです。しかも知性が悪いのではないのです。知性も感性も大変大切なものです。問題は、隔てがあるからです。身と心とが隔たり、物と自己とが隔たり、自他が立って対立する事になるからです。では、その隔たりは何故生じたかです。

それは言葉を覚え概念を獲得した時からです。それからは環境の物事を認識して情報化し、自分の考え方というものを形成します。知力はそうした観念操作をする機能だからです。隔たりの始まりです。そして得られた思想的理論は自分としての世界を持つ事になり、それに固執する事から対立が始まっていくのです。この「認めて固執する」ことが自我の本、迷いの根元なのです。

坐禅修行が必要なのは、知性では隔たりを取る事が出来ないからです。どうしても正しい手段が必要なのです。知性の働きが隔たりその物を形成しているではありません。勉強などは知性も情報も極限的に駆使し尽くしています。けれども身と心とが一体になってい

る限り、隔たりはありませんから、勉強その物しか無いのです。徹するとはこの事です。その時を勉強三昧と言うのです。自分も何も無いので無我とも言うのです。時間も空間もありません。だから数時間があつという間に経っているのです。

大事な着眼は、只、その事のみ、ということです。いきなり自己を超えた処です。即ち対立的自意識的観念も感情も意志も無いのが本来なのです。勉強が只在ただけです。否、勉強すら無かったのです。その事が在っただけです。ここが大切なポイントなのです。

ところが隔たり現象自体が知性では分からない、だから知性的な計らいでは手が着かないのです。否、隔たりと言う心の癖は知性そのものの本質的な特性ではないのです。先天的なものではないということです。現実瞬間に作用する心そのものは、是でも非でも癖でも無いのです。迷ってもいないのです。天然の働きですから光明なのです。

ところが隔たった状態で作用するから、実際に問題化する厄介な代物となるのです。見た物聞いた事に忽ち翻弄され攪乱されてしまう現実があるでしょう。その事を物語るものです。

もっと具体的に言えば、先ず、相手を認めること。そしてそれを情報化し概念化すること。これらが隔たりの根本、仏経語で言うなら無明です。これは総て自己を立てた知性の働きであり心の癖です。これが隔たりなのです。知性そのものが隔ての正体ではありません。ベースになっているものが知性ですが、知性は瞬間に発動して而も瞬間に消滅している物で、決して跡形のない物です。それを認め情報化するから無明となるのです。癖も無明も瞬間に起こるものなのです。又瞬間に滅しているので、癖も無明も又一時の姿であり真実は空なのです。この真実を体得するのが坐禅の目的です。

「隔てている心の癖」を取れば、本来真理のままだと言う事がはっきりします。対立や善悪を超えた自由な世界に生きている事がはっきりするのです。だから坐禅が尊いのです。

瞬間瞬間周りの環境との関係性を展開している、その事を人生というのです。流転している今の作用を言うのです。今は全てを包含していて、しかも止まっていない全くの生ものであり自由であり、生命その物が今です。私達の生活その物の事です。隔たりが在る限り葛藤があるので、どうしてもこれを陶冶しなければ成りません。坐禅修行が必要なのはそのためです。

現実的に言えば、この身体が無くなれば暑さも寒さもなく、食べることも着る事も無用です。欲しいとか不味いとか美味いとかも無くなるんです。この身体あるが故に色んな欲望現象が出てくるんです。

仏法とはこの身体を無くす、捨てることです。無くするとは忘れることです。忘れるということは拘らないということです。拘らないとは、縁に従い去ることです。「只」在る。今は流転し過ぎ去っています。だから本質的にはその時、その場の関係性だけです。これを因縁所生の法というのです。とらまえどころが何も無いのに、縁に依って自由自在です。これを即ち空と言うのです。

このことを本当に体得したらいいんです。縁その物になって我を忘れる事です。我を忘れるとはこの身が氣に掛からなくなる事です。これを無我というのです。縁に応じて対立しないので自由自在です。

そうすると自分という意識的に作った価値観とか、あるいは考え方と言った観念的なもの

が邪魔であり迷いだと言う事がよく分かります。観念上で作りあげた虚像にすぎないことが本当に分かるから、迷いから醒めるのです。つまりその作用は天然の様子であり、真如法界そのもの、本来本法性、天然自性心であることがはっきりして迷わなくなるのです。

今世界を騒がしておる、あの凶悪なテロ事件ですが、根底には宗教が係わっていますね。宗教というのは信じることから始まるんです。信ずることは批判や常識や感性や分析的な領分を超えて普遍化することです。と言う事は絶対固定化した世界ですから、理性も科学性も超えてしまうということです。つまり人間及び社会、そして国家まで拘束する存在となるのです。何れの場合にせよ絶対視した時から神が存在するのです。

道理に合おうと合うまいと、時代から外れようと外れまいと、現実としてそれが将来どうなるとか一切抜きにして、先ず神有りきと言うところまで絶対視した信仰は危険なのです。心を固定化させている状態ですから、決して健全ではないのですが、信じて疑わなければ心は安定していますからとても楽なのです。けれども自己責任を元とした自律心が育まれ難いので不健全なのです。そして自由で闊達な働きも出来なくなるのです。

理由は絶対視した瞬間から知性も感性も意志も、ある固定化した方向にしか働かなくなり、いわば無知性化するからです。

それで生まれ落ちるや神を崇め絶対視させることはマインドコントロールとなるのです。例えば三時に礼拝しなかったら、それは神に背いたことになって、救いは愚か神からの酷い仕打ちをうけるかもしれないという恐れを抱くようになるのです。絶対にそれをしなければいけないし、それさえ真面目にしていたら神は自分を救ってくれると決定的に思ってしまうのです。

つまりこうした拘束性を主体にした信は、底辺に於いて決定的な恐怖心と依存心に繋がるので、知らずしてマインドコントロールされてしまうということです。ですから社会的な責任や仕事の重大性などとは比較にならない程精神をコントロールしているのです。これが殆どの宗教の姿です。

釈尊の教えはここが根本的に違うのです。絶対視をする自己がある限り、決して根源的に救われる事はないので、自己を陶冶しなければならない、と言う教えです。

心の中に絶対視する自己とそうでない自己の二極が有るため、内に於いて初めから対立しているので、葛藤感亂は免れる事はないと言うことです。問題は相手を認めて隔てを作る自我に有ると言うことです。つまり釈尊は、自己に迷いの根源を見出したのです。

信仰対象としての仏でも神でもないのです。絶対視しようとしたり普遍化して信じようとする自己を超える教えなのです。心に対立が起こる、その根本を解決する教えと言う事です。

仏道修行は自己をとることにあるのです。坐禅はその元です。最も端的で、誰もが達成する事が出来るからです。だから坐禅は尊いのです。

法から言えば、取るべき自己などは無いのです。しかし、現実として見た物聞いた事に心を奪われ感亂し葛藤する事実があります。これが心の癖であり、身と心とが隔たって自己と言うものを認めるので、その様に混乱してしまうのです。

従って自己という本体のような物は何もありませんが、隔てている限り認める自己が有る

のです。これを陶冶するのが坐禅の目的です。只管打坐は隔てを越え癖を超越した本来の世界、純粹そのもののことです。ですから只管打坐にてっすれば一切の問題は解決するのです。只管打坐と言っても言葉や観念で体得できるものではない、科学の手が届かない世界です。それで正しい師匠の導きが必要なのです。心の根本をどうしたら解決付けられるかをよく聞いて、その通り実行していくしかないのです。

只管打坐は本当に坐禅ばかりを言うのです。見るときは見るばかりです。聞くときは聞くばかりです。この時、自己も癖も何も無いのです。我を忘れて物事のみになることです。つまりその物と一体になる事です。その時身体も無くなるのです。一切が無くなった時、一切が明瞭するのです。

一番の要点を外さないでください。その要点とは何かというと、「今」です。「今」に迷いや癖や自己など何も無いのです。「今」に徹する事が坐禅の要訣です。

つまり禅は今一瞬に着目することです。そうすれば出てくる念は自然に消滅しています。自己が無いというのはこの時実感できます。しかしいきなりその様な事が出るものではありません。

過去を引きずった迷いの自己と、過去のこだわりを破ろうとする本来の自己との戦いとなるのです。初めはどうしてもこの戦いですから辛いです。死ぬほど辛いです。出てくる念は全部切り捨てることです。その実践が坐禅です。坐禅その物になる事で切るのです。

どうしても初めは雑念との戦いです。

これから坐禅をしていただきます。一瞬を見失わないようにするために一息を見失わぬよう守ればいいのです。

本来今しかない、どこまでいってもこの瞬間しかない。それで今に目覚めた人を覚者というのです、仏というのです。今に目覚めるんですから今を離したらいかんということです。今とは何ぞや。坐禅の時は坐禅です。他に何も無いのです。呼吸の時は呼吸です。歩くは歩くが今の姿です。徹頭徹尾今その物です。本来迷いようが無いのです。如々としてありのまま、大自然の様子です。これが本来なんです。この本来の投げだしの「今」のままに成って我を忘れきる事です。一呼吸に成り切るのです。

いいですか、一息は現実の作用ですから、分かる分からないの問題ではありませんよ。ひたすら一心不乱に呼吸をするだけです。全身の一呼吸です。

一息が本当にできるようになったら隔てが取れていきます。不純物が無くなるという事です。どこまでもどこまでも単純なこの一息を徹頭徹尾するのです。

六祖慧能大師は八ヶ月間、五祖から命じられて米搗き部屋に入って朝から晩まで一踏みだけです。臼を踏むのに徹頭徹尾です。それがあの有名な六祖慧能禅師の真骨頂です。たった一つのことが何物にも拘束を受けずに、淡々（単々）とできるようになることです。これが解脱の境涯です。だから今、今本当に一息をやれば、皆六祖なのです。

一瞬、一瞬を大事に大事に、一步一步を大事に大事に、一呼吸を大事に大事にするのです。自分の心だけを問題にしてください。一息だけを問題にしてください。一瞬だけを問題にしてください。他を認めたらいけません。認める自己が有る限り、自己を根本的に越えることができませんから。では。

第九回目 普勸坐禅儀提唱

さて普勸坐禅儀の提唱です。いよいよ終わりに近づきました。提唱は分かる分からないではなく、初めての方もとにかく「只」聞いて下さい。分かってやろうと知性を前面に出したらだめですよ。知性を抜きにして只淡々と聞いておればいいんです。縁のあるものは残る、縁の無いものは通過して落ちていきます。消化ができないものを心の中に堆積させると、将来やっかいなことを起こしますから、縁の無いものは心からどんどん、どんどん捨てて行くんです。それよりも心に取り込まないことです。「只」聞くのが正法です。純粹に聞くと言う事です。

いいですか、只聞くとは満身耳になり提唱その物になる事です。概念で受け取ったただの情報になって法には成りませんよ。

さて先般は「万別千差というとも、只管に参禅弁道すべし」ここまででした。今日のところをちょっと通して読んでみましょう。

「何ぞ自家の坐牀を抛却して、謾りに他国の塵境に去来せん。若し一步を錯まれば、当面に蹉過す。既に人身の機要を得たり、虚しく光陰を度ることなかれ。仏道の要機を保任す、誰か浪りに石火を楽しまん。しかのみならず形質は草露の如く運命は電光に似たり。〇〇しゆく忽として便ち空じ、須ゆに即ち失す。」

今日はここまで提唱しましょう。

今まで説来たり説き去ってきたのは、道元禅師の願いと意志と理想を伝えるためです。この普勸坐禅儀は何を説かれているのかというと、心を決着付けるためにはこのように坐禅をしなさい。隔てが取れば宇宙の真理、即ち大法が分かりますよ。本当の自由自在を得る事が出来、人生この上ない安心と自信と喜びに満ちたものになる。それでこそ人間に生まれた価値があるんだということ、しかも大法は一代限りのものではなく、尽未来際にわたって確かな真理の世界であることが分かる。つまり永遠の命が手に入るというわけです。大法を得るための具体的な方法、即ち只管打坐の方法を説いているのです。それもいよいよ終盤に入ったわけです。

「何ぞ自家の坐牀を抛却して、謾りに他国の塵境に去来せん」

これは一口に言えば、初めから法でないものはない。今既にそのままだ道ではないか。真理の真っ直中に在るのだから、他に向かって探し求めるものではない。と言う事です。

何ぞは、何ぞです。どうしてそんな馬鹿な事が出来ようか、と言う底意が在るのです。自家の坐牀とは坐禅する処で、本来既に道である此処、今は只管打坐を言うのです。それを放り出して、全く意味のない誤った世界に法を求めたりする、その様な事はあっては成らない。と言うのが「謾りに他国の塵境に去来せん」と言う意味です。

他国の塵境とはきつい言い方ですが、法のない汚れた世界と断定しているのです。だからその様な迷った事をしては成らぬと言う事です。誤ってはならないのは、他国も塵境もその様なものは何も無いのです。けれども理屈や知識を頼りに道を求めようとする、その誤った心得違いを言っているのです。只管打坐以外には、みんなが確実に道を得る方法はないぞ、との底意です。

知性を働かし、人がああ言った、こう言ったと沢山の書物をあさって知恵袋の中に貯めたところで、実際の心を解明できるものじゃないんだと。そういう愚かなことをするんじゃないぞと、道元禅師力を込めて言っておるのです。ご自身がこの過ちをおかして永く永く

苦しんだ経緯から、轍を踏ませたくない渾身の慈悲なのです。

とにかく IQ200 以上ある道元禅師はあの比叡山に二年半おる間にすべての蔵書を二度精読しているのです。博覧強記ですから一回読んだら忘れぬ頭脳です。頭では仏法という概念的知的な事柄は全部分かっているのです。分かっているもさっぱり決着が付かなくて、にっちもさっちもいかなかったのです。言葉の世界、概念の世界に虜になって、他国の塵境を去来し往生したのです。

概念や知性の外の問題だということ、その問題の根本を教えてくれる師がいなかったために、命がけで中国に渡り師を訪ねて三年間を費やしたのです。正師の元で解脱をした途端、何てことはない、初めから道であり、自分も実は迷っているものは何もなかった。只その事が分からなかっただけだ。と決着したのです。その戒めからの言葉なのです。

本当に只管打坐に徹しなさい、と言う真意をくみ取り、その通り実践するのが祖門下の道です。

「若し一步をあやまれば、当面に蹉過す」

説くに及ばずです。心を解決するのですから、出てくる一瞬を見失ってては問題解決には成りません。なのにこれを止めてああだろうか、こうだろうか、分かる分からないなどと知的行為に及ぶと、根本が違ってきますから始めから方向違いを起こしているのです。本来に到達する事ができないことは言うまでもない事です。

やがて天地の差が出てくるぞということです。食べるときは只食べるが真実です。ひたすら只食べたらいいいんです。歩くときは歩くが真実ですから、只歩いたらいいんです。只坐禅、只呼吸です。ここには何ら観念はいらないんです。

ところがちらっとでも何かを認めて知性を働かせると、忽ち隔たってしまう、見聞覚知の悉くが真実からずれてしまうのです。ここを「若し一步をあやまれば、当面に蹉過す」と言われたのです。

ここのところですね。身体が機能しておる事実と、意識上の観念現象とは全く無関係であることを明確にし、その境を確立しなければなりません。これは体験的に自覚するしかないのです。それ故に修行は身体を通して行じることであって、観念を用いて認識や判断していくこととは根本的に違うのです。体得するためには、理屈無く実践をするしかないのです。

「既に人身の機要を得たり」

既にとは本来からという意味です。本来から人身の機要を得ているということは、釈尊もそうだし、達磨大師も道元禅師も祖師方も、総ての人が、人としての機能を生まれながらにして全部等しく保持しておるぞと。見る事、聞くこと、味わうこと、立つことも自在、歩くことも自在、右向いたり左向いたり、考えたり笑ったり・・・ 誰の力も要しないで何でも出来る。皆人身の機要を得ているからです。これが本来の道であり、確かにこれで良いのだと決着する事なのです。他に何も無いのです。

「虚しく光陰を度ることなかれ」

言うに及ばず。言えば道に背く。言うだけ光陰を空しく費やして居る。今、既に道なれば、言うに及ばずではないか。どうしてこれを空しくできようぞ。これは誰も言う言葉です。本当に実践する事が禅と知るや知らずや。今です、今です。本当に今です。今しか体得する時節はないのです。今しか体得するものはないのです。

大切に日々を過ごしておればいいんです。敬うべきは敬い、尊ぶべきは尊び、常に心身自らも愛し、自らも敬って生活するなら、一日、一日の行事を無駄にするはずがない。必ずこの人身の機要が光りであったことを知るのです。これが本当の人生だという確信が得られるのです。外に求める必要がない、既に十分という満足な世界です。

今、既に道です。それを忘れたら他国の塵境を彷徨う事になるのです。虚しく光陰を度ることなかれ。今じゃ、今じゃ。

参同契という、石頭大師がお書きになった大切な教典の中の最後の句がこれです。「虚し
「仏道の要機を保任す」

仏道とは仏の道です。本来のあるがままの世界です。隔ても癖も汚れも迷いも無い世界です。既にその存在でありその人なのだ。只、知らぬものが自ら知らないだけぞと。

我々は知る知らないに関わらず、この道を日常使い果たしているのです。けれども自らの坐牀を捨てて他国の塵境に去来しているから、葛藤をおこし定まりがつかない。それで真理がぼやけて分からないようになっておる、騙されておるということをよく知りなさいということなんです。これを解決するための仏道であり修行であり只管打坐なのです。

「誰か浪りに石火を楽しまん」

石火というのは、石と石とをぶつけると火が飛び出るけれども、その火というのは瞬間にぱっと消滅するでしょう。歓楽極まって哀情多しという言葉があります。楽しさを求めてお金を使い、エネルギーを使い、時間を費やして感情を満足させてはみたものの、そんなものはそのときが過ぎ去ってしまうとただ空しさだけが残って、却って悲しく辛いだけだと言う事です。感情を満足させただけのものは具体的になんら得るものがない。感情が覚めてみると夢の如く空虚な心に襲われるのみです。そういうものばかりを追っかけてどうするのかということです。

「しかのみならず、形質は草露の如く運命は電光に似たり」

まだその上があるぞ、よく聞いておけと。形質とはこの身体です。朝露の如く、時がくれば歯も抜ける、耳も聞こえなくなる。やがては大小便も垂れ流しするようになり、嫌がられながら空しい時を費やししながら、苦しみに苦しんで挙げ句の果ては死んで焼かれるばかりだと。

またこの生身は、何時どのような悲劇に出会うか分からない。先般の地球を騒がしたテロ事件にしても不測の事態でしょう。起こったら最後その余波たるや世界中に影響を及ぼしていき、しかもこれがまだまだ永く続いて、そこからまたどんな副作用を起こしてくるか分からない。予測が付かないでしょう。こういう人間の運命をよく知っておきなさいと。あつという間の出来事ですわ。正に形質は草露の如く運命は電光に似たりです。

かようなものためにね、ただ石火を楽しむようなことだけして時を費やしておっついいものだろうかと、道元禅師の訴えです。この心が響かぬ輩は人間ではないのです。

「〇〇しゅく忽として便ち空じ、須ゆに即ち失す」

しゅく忽のしゅの字は初めてごらんになった方が多いと思いますがこの字は「犬が早く走り抜けていく」という文字です。忽というのは「あつ」という間を意味しています。二つの文字で、瞬く間に消えて無くなるということです。「便ち空じ」というのは忽ち流転して空しく過ぎ去ることです。須ゆも僅かな時間、忽ちの意で、さっと無くなるという事です。この地球もやがては滅びる。大きく言えばこの宇宙もやがて消えて無くなるぞと。我

々の一生涯もその通りです。

ところが時間的に現象的にそうであっても、この道はそれらを成している普遍の道（因縁所生の法）ですから変わり様がない、無くなりようがない宇宙の命です。だから道に目覚めるとは時間的現象的な支配を免れることです。生まれ変わり死に変わる悪い癖、生死の苦しみから抜け出る事です。解脱とはこの事です。

今この瞬間これで充分、しかももやもやしたものが何も無い、自信に満ちてすかつとしていたら、これほど究極的達成感、完成度の高い人生は無いでしょう。結局は今を大切にする以外にはないのです。

本当の道を求める者は、本当に今を追求する人です。既に今です。求めなくても既に道です。今、この縁のまま、素直に「只」あれば良い。自信が無いと言うことは、今より外の所に心が行っているからです。他国の塵境に去来しているからです。安住の場所を失っているから定まるわけがないでしょう。イライラもするし不安も付きまとうし、疑心暗鬼にもなるのです。今がきちんとしておれば、他を見て対立することはなく、羨む事も惨めになる事もないのです。

みなさんは個としての「今」をもっと大事にして、今のこの存在をもっと敬ってやってもらいたいんです。一步、一步をもっと大事してもらいたいんです。道は味わい深いものです。軽く扱っているから、道の味わいが分からず、他に求めてしまうのです。このことをもっと重く見て本当に坐禅をしてください。仏の要機を満たしておるんですから、努力次第だと言う事です。今、今に安住して他を見ずに淡々とやってください。

次回十二月の八日で、この提唱もいよいよ終講となります。道元禅師の素晴らしい文章力と内容、八百八十一文字で出来上がっておるこの普勧坐禅儀は、一口に言えば本当に只管打坐をしなさい。こう言われておるのですから、簡単明瞭に受け取って、その通り実践してください。くれぐれも言葉に付いて回らないようにしてください。

茶話会

参禅者A：坐禅の合間合間に身体を捻ると言う、誠に珍しい坐禅をさせていただいたんですが、念が簡単に好く切れて非常に良かったです。ただ、合図の度に必ずそう言う風に身体を捻らなければいけないのでしょうか。

老 師：本当にただ坐われるようになりましたら、只坐っておればそれでいいんです。したがってどうしても捻らねばならないというものではありません。じっと坐禅していると、高々二時間か三時間程度なら大丈夫なんです、何日も、何日も坐り続けると、腰や肩や首や腕が硬直して、呼吸すら困難になるのです。当然ながら非常な全身疲労感が伴い、それでもなお押し坐りますから最後には潜在体力を使いきってたくたになってしまいます。そうなったら努力する気力さえも失せてしまい、全く埒もない事になるのです。

ですから大切な事は、人間の基本ベースである生き物としての必要な条件を見失わないようにすることです。適当に動くことが必要であり、それを取り入れた方がずっと有利だということ。

一つには雑念を切るためです。これが基本です。二つには身体を自然にしておくことです。そのために工夫を兼ねた動かし方をする。つまり動中の工夫と、静中の工夫を一緒にする

ことです。それからもう一つは、眠気を除去するのに極めて有効です。

したがって初期参禅と言いますか、念の無い念に気が付くまでは積極的に捻った方が得策です。僅かな雑念でも腰の捻りで強制的に切ってしまいますから、それだけ向上が早いのです。別口として大切な事は、師から言われたことはとことん愚直にすることです。それが修行者の取るべき態度です。自分というものを立てると、成り切れませんし自己を忘れることが出来ません。南泉禅師が趙州に、「不疑の道に達すれば廓然として洞豁なるがごとし」と。不疑とは、こうしたほうがいいのではないか、でも信じられないな、というような疑念が起こる余地が無くなると徹するのです。道のままになるのです。そうすると目に立つ物が無くなり、からっとしてすっかり楽になるのです。

大切な事は縁に従って自己を滅することです。腰を捻れと言われたら愚直に捻ることです。分かりますか。心のどこかで自己を立てて是非をしているものがあるのです。先ずこの事に気が付く事です。縁に成りきれない時は必ず自己が起ってその物と隔たっているのです。大上段に大乘の法門から言うと、言われたままひたすらする。自己を捨てて縁に従いきる事です。そうあれば疑問は生まれてこないからいきなり不疑の道に入るのです。一直線です。

ただ修行初期に起こり勝ちなのは、ようやく一息が出来はじめて雑念を切るコツが分かりかけた頃、体を動かしたら逃げそうな気がするんです。それまでが大変苦しただけに、逃がしてなるものかという不安感があるためによく捻らないのです。恐れることはないんです。今は来る処もなく去る処も逃げる処も無いのですから。でも気付き初めというものは、それを見失うまいと思って一生懸命です。呻吟がよくないです。逃げる今など無いのですから堂々とやったらいいのです。

参禅者B：今日初めて伺いました。私は常々人間は一人一人何か目的をもってこの世に生まれたのかなと思ってたんです。それぞれの人が何かすべきこと、そういう我みたいなのがあって、それをやり遂げるといのが人生かなと思っておりました。けれども老師のお話を聞いていますと、目的とか一切忘れる。とにかく本来全て自分の内に在って足りているので、真剣に今の縁に従いなさいと言うことをおっしゃってました。今まで私が思ってきたこととはずいぶん別のことのような気がしました。また、人がこの世に何か貢献するというか、何かすることで人生を果たしている自信になるには、まず今を本当に生きるということが先なのかなと思い始めたんです。その辺のことをお話をしていただけるでしょうか。

老 師：なにか大変女性らしいご質問ですね。お話が非常に根元的なことも秘めておるものですから、果たして真意が通じるかどうかちょっと疑問なんです。が、そこは意のあるところを受け取ってくださいと信じてお話をします。こうした話しも勿論、「只」聞いて下さい。

とにかく縁があったから生まれたと言う事は確かです。したがってその両親に巡り会ったと言うこと自体、計り知れない無量の縁の出来事なのです。その親を選んで、そして親のお腹を借りてこの世に生を頂いたと言う事実。別に自分でなくてはならない必然的な理由は何もなかったのです。でも人間として現れるだけの因縁があって、そして自分に合った両親に巡り会えた、と言う事実。ですから親は勿論、真如実際の因縁に無限の恩を感じ感謝の出来る人は、正に生まれるべくして生まれてきたのです。従って恩と感謝は前因縁を

物語るものなのです。

ところが同じ兄弟に生まれても、仲の良い兄弟もあれば殺し合う兄弟もある。前世で憎しみ合い敵対し合ったものが一つ両親の元に生まれて、今生において過去世の悪業を解決すべく一番親しい間柄に生まれてきたのかもしれない。好い兄弟となって人生をした者もいれば、目的を果たさずに殺し合ったり、憎しみ合ったりする兄弟もたくさんいるのです。原因無くして結果はないのですから、因果の道理から観るなら、その様に察する事は至極自然なのです。それを宇宙の意志とか神の意志のように捉えて運命づけて見るか、たまたま縁があっただけなんだと縁の偶然性を強調して取るかは人々の取り方です。だが、無自性空にして因縁所生の法から言えば、自然の道理を無視したり偏った見方をする事は無理があるのです。

例えばモーツァルトのような人は小さいときから路上に楽譜を書いたり、聞いた物音がすぐ楽譜になったりする才とか、素晴らしい絵になったり文章になったりする力は、その人に与えられた才です。本来秘められているものですから、それを刺激する縁に触れたらそれらが吹き出てくるのです。そのために生まれてきたような、運命づけられたようにその才のままに生涯をやっていく人も居ます。

でもそう言う風に思おうが思うまいがすべて縁の問題なんです。縁が深く大きければ、須くそれが優先するのです。幾ら才があっても縁がなかったら逸れてしまうのです。この世は無量の縁です。因果の大博覧会です。その真っ直中ですから努力によって隠れていた才も発露します。またまさかと言った発展系となって自己増殖型で大成する人もいるのは、因縁所生の法だからです。しかし縁そのものが無かったら伸びようがないのです。

そう言う風に自由にとった方が自然なのです。とにかく我々の体内には、一つの細胞が生命進化を遂げて人間に至る間に、経験的に獲得してきた情報がたっぷりあるのです。数十億年かかって体得した情報が、短い生涯で総て現れると言うことはあり得ないことです。九十年、百年の間に現れる才はほんのわずかです。僅かな才が人生を豊に支えてくれるのですから、決して大だけが人間や社会に役立つとは限らないのです。

一人一人に潜在しておる才を全部ひっぱりだして並べたならば、おそらくは一億人おっても同じような物をみんな持っていて、違いはと言えばどの才を活かすかと言うぐらいです。ただ浅いところにある才は縁に触れやすく、深く沈潜していてどんなに努力しても手の届かない底に有るものは、芽吹くことなく生涯が終わってしまうのです。そうなる浅いか深いかは運命的であり、またそうなる原因も有ったと言う事です。縁というものは摩訶不思議であり、同事に摩訶不思議さが人々皆違うところが将来発展的なのです。公平であって違うと言う極めて因縁無量の測りがたい処です。

みんな同じだったら個としての存在意義が無く、また面白くも何ともない味気ない世界となるところです。みんな違う、その違うところがまさに運命的だと言う事です。でも総てただ縁ですから、違おうと同じだろうと無常の流転で総て無くなるのですから、夢中に夢を追う事もほどほどが大切なのです。

自分に秘められた才をどう引き出すかという事とは別です。潜んだ才を探し出すのは親であり、先輩であり、師匠であり、自分であり、畢竟努力です。ですが低俗な夢探しはいい加減にすべきです。やはり理想としては先ず道を求める心意気が大切なのです。「芸多くして道成らず」という言葉があります。あれこれ多彩にして多義に涉ると、何一つ体得で

きないと言う事です。才が才にならないと言う事です。

したがってまずは自己責任を持って生きなきゃなりませんので、自己の確立が基本なのです。中途半端な人間性では、才に溺れてしまいます。禅も悟りもそうです。人格的に欠損のあるものとか、中途半端な坐禅をして自信を得ますと、何者も寄せ付けない信念が備わりますから、世の条理を逸脱したことだってしかねないのです。

それで修行は境涯を磨くと同時に秩序というか、ものの関係や条理や規矩というものをよく身につけておかねばなりません。個と全体との兼ね合いの中で些かも不自然なことをして世を乱すようなことがあってはならないのです。本当の意味で世間をよく知らねばいかんということです。その上で境涯が成った時、仏法として大号令を下せるのです。肝腎なのは道が分からないと体勢に流されてしまうので、やはり道を得る事なのです。

この間のテロに関してですが、あの向きの宗教家が出てきて何を言うのかと思ったら、聖戦だから立ち上がって戦えと言っているのです。本当の宗教家であり指導者ならば、人は皆信じ合うべきであり、殺し合う正当な理屈などはない、と言わなければいけません。それが真実の宗教であり宗教家なのです。宗教や思想や歴史に対して、余りに執拗な拘りを持つと理性の本来が崩れてしまい、狭隘化して動物的になってしまうのです。だから自分たちに反対する者は敵だ、と言う感情がらみの意識になってしまうのです。だから殺してしまえ、というような指導になるのです。

宗教家というものはあらゆるものを超越して、人間としてあるべき姿を示唆しなければいけないのです。

拘るととにかく恐ろしい事になるのです。だから相手立てて拘った宗教は全部問題を起こすということです。拘る自己を越えていく教えが本当の宗教です。驚きました。しかも何十億という信仰者がおるとなると、この地球には容易なことでは平和が訪れることはないようです。

ともかくにも宗教指導者からして戦うよう訴えているのですから大変なことですね。やれやれ情けないことだなとテレビを見てつくづく思いました。

我が師がおられたら、お前は絶対ああいう宗教家になるんじゃないぞと、烈火の如く厳命をつきつけられたはずですね。かくして禅者は自己を陶冶して、本当にかく生きなければならない、平和の根本はかくあらねばならないということを指導者する宗教家でなくちゃならんのです。やっぱり只管打坐を勧める事になるのです。そして拘る自己を早く陶冶してもらえないのです。

話が変わりますが、香川さん、あなたは立て続けに三度少林窟へこられて、その後日常がかなり楽になったというお話でしたね。そこのあたり、日常あなたがなさっておる修行の様子を気付きのままをちょっとお話ししてみてくださいませんか。

香川氏：ここでお話するのはおそれ多いことですがせっかくの仰せですから少し話しさせていただきます。

老師が三度と仰ったのは実はこの八月にですね、ここでしか時間が取れないぞとそういうせっぱ詰まった気がしまして、山に上がらせていただきました。最初は十日間いきました。そしてどうしても機会を作りましてまた行きたいと思ひまして二日間上山して、それからまた八月の下旬になんとかやりくりしてもう一度参禅をしました。どうしてそこまで行く気になったかという、これが本当の自分なのかなという、なにか本当のものを掴みたい

という願いからでした。

ある人に言わせると、私たちには親から刷り込まれたものが五つあると。一つは急ぎなさい。次に強く成りなさい。完全でありなさい。頑張りなさい。最後に親を喜ばせなさい。そういう親からのメッセージで成功した人もたくさんいらっしゃると思います。でも案外自分がやってるやっているとんでも親の命令をそのまま聞いてるといふか、そういったところが中にはあるかもしれません。そういった自分という者を根本的に見つめ直したいなところ思ったわけです。

山内においては老師を始め諸先輩方から様々なご指導とご協力をいただきました。ある時のこと、老師の前でお茶を頂いているとき、「香川さんそれが禪定だよ」と言われまして、はっと気が付くところがありました。「もういいだろう、何も話すことなんかないだろう、このままでいいだろう」とおっしゃいました。そりゃそうだ、そっくりこのままでちゃんと今だもの、もうそれがそれだから、どうだこうだではなく良いじゃないか、という実感がありました。

毎日が戦場のような職場の中ですけれども、本当の自分だとか、嘘の自分だとか、そんなことを思うこと自体がどうでもよくなって、毎日の仕事を力一杯やってる、そう言う毎日をおくっております。

それで毎日どういう修行をしているのかということですが、老師の仰せでは朝晩一時間づつ必死になってやれとそういうお話でしたけれども、朝は一分でもおいしいものですからいそいそとでかけていきますけれども、夜帰ったときに五分でも十分でも十五分でも、休日になれば一時間でも二時間でもと思っております。

少林窟を下りてから時間が経つにしたがってやっぱり変化してきまして、それは寂しいものですから、これはならん、これはならんと、あれだけ苦勞をして得たものをここで落としてなるものかと一生懸命坐っております。そういったことです。

高瀬氏：あの法戦式というのはどういうものなんですか。

老師：少林窟は勝運寺というお寺の境内にありまして、少林窟固有の空間じゃないんですね。それは道場を開かれた義光老師が住職をされていたから、それで一角に禅堂を立てられたのです。この度、甥が勝運寺の住職になりました。今回新しい住職になり、晋山式という大きな法要をするわけです。前の住職が退いて新しい住職となると、一人宗教家が減るわけです。それを補うために新しい住職は次の宗教家を育てておかなければならない義務があるのです。それが首座という僧です。長老とも言います。その力量を示すために法戦をやるのです。ちょっと一時間ぐらいかかるんですが、生涯に首座は一回しかできません。その一回の儀式のために伝えるべきものがあるのです。師匠から教わってきた代々の伝統的なものがあるのです。これが身体作法の元になるので、きっちり仕込む必要があるのです。住職になって首座を作るときに役に立つのです。それで一生懸命今鍛えてるわけですね。

とても緊張感のある、そして伝統的なものですから、文化的にも精神性の高い、見応えのあるものです。晋山式という法要はスケールとしてとても大きなものです。そのために一年がかりで準備するのです。少林窟も勝運寺のお世話になっていますから、何も力になれませんけれども諸処の掃除ぐらいは手伝うようにしています。

法戦式はそういうことで新しい若い宗教家を育てる第一登竜門だと理解しておいてくださ

い。

老 師：ここに「警策聞解禅苑抄記」と題し、警策の由来を簡単に記述してみました。目を通しておいて下さい。本物の禅僧同士が警策をどのように使ったか、その出会いなど痛快に感じ取って下さい。どういう法戦をやったかはそれをお読みになれば分かるでしょう。そこに警策が一役も二役もかかわっているのです。

こういうことなんです。ある僧が定州という老師のところから烏臼という老師のところに入門してきました。早速烏臼老師がその僧に問うんですね。「定州老師の法と私の法と何処が違うのか」と。そうしたらその僧が言うに、「異なっていません、同じです」と。法に二つはないんですから当たり前です。ところが烏臼老師は、「もし定州老師と俺とが一緒ならば、わざわざここにくる必要はないじゃないか。お前は彼の所へすぐ帰れ」と言っていたか警策を喰らわせたのです。

つまり、別な事はない、と言ったところに挨拶してみたのです。人々の老師には人々の家風がある。だから色々な個性豊かな指導者が居て、各々にぴったりする老師に就いて修行するのが良いのです。法は無二無三ですから違いはありません。が、法と人と別々に見ている様子が分かるでしょう。そのものが法です。その人そのものが法であれば、個性的な違いそのままが法、と言うことが明瞭するところまで空じ切らねば本当の法ではないのです。個々の差別を軽く看ているのではないか、と烏臼が多少の懸念をしたから荒っぽい点検に出て、警策に物を言わしたのです。

又、違うと言っても殴られるんです。法は別がないからです。烏臼のような向こう一杯の老師にかかる、どっちにしても叩かれるんです。叩く、痛い、何れも法だからどうしようもないのです。

僧もなかなかの者ですから何とか言うのです。「本当に棒を活かして使うだけの力量があるんなら、そんなに人を荒っぽくぶん殴るな」と。それを聞いた烏臼老師は一段の力量底の人ですから、「ほうほう、今日現れたおまえは久しぶりに殴りがいがあるな」と言うてまた遠慮無く叩いて、相手の力量を観るのです。そうするとその僧は、この和尚何と言ってもぶん殴る荒っぽい老師だ、と言うわけで出て行くのです。烏臼は戦いになれてもいるしこういう対応が好きと見えて、出ていく彼の後ろから挑発語を浴びせかけるんです。「無茶苦茶に叩かれる者が居るわい」と。法戦を求めての一矢が見事的中して、案の定僧が振り向いた。「だってしょうがないじゃないですか。あんたの手には棒があってこちらには無い。近寄ればなぐられんじゃ、堪りませんよ」。烏臼はそれだけの人だから、「おおそうか。お前にその力量があるんなら俺のを貸してやるぞ」と身代を明け渡してしまうのです。余程の力量が無ければこうゆう具合には出来ない事です。この僧は待ってましたとばかり、さっさと棒を奪って、自分がやられた通りを烏臼にするんです。つまり、奪った棒で遠慮無く叩いたのです。これも余程の超越底でなければ出来ない相談です。そしたら烏臼が「無茶苦茶じゃ、無茶苦茶じゃ」と言んです。そうしたら僧は「このように叩かれる者が居るわい」と互角をやらかすのです。烏臼は、「いやいや貴殿ほどの御仁を、いきなり叩いたのはちと失礼だった」と素直に認めたのです。すると僧は棒を返して、教えを請いにやってきた客分の位置に戻り、丁寧に礼拝したのです。どこにも自己が無いところを観なければいけません。いや失礼つかまつった、という念が有ったか無かったかを観て取らねばならんところなんです。何も無いから是れだけの自在があるのです。それを見た烏臼は矢

張りただ者ではない、「お主、たったそれだけですます気か」と何処までも向こう一倍です。今度はその僧が、「わっはっはっはっ」と大笑いして跡形無く出て行ったのです。見事です。縁に従ってさらさら、さらさら流れておるでしょう。その天晴れな姿に対して烏臼は、「見事じゃ、見事じゃ」と誉めざるを得なかったのです。是れ印可の一句です。

烏臼は馬祖大師の弟子ですから、百丈や南泉とみな兄弟弟子になります。このへんから中国大陆に禅の黄金時代がやってくるんです。そして百丈によって初めて禅堂がつくられ、そのときからこの警策が頻繁に使われたものであろうと、これは私の推測です。徳山に至っては臨済の喝と共に棒使いの名人として天下に名を馳せています。

このように祖録は生き生きとした物語です。源氏物語は言葉の綾を使って感情のなまめかしさを文章で現したのですが、祖録は簡潔な言葉で出会いや生き様を活写してるのです。だが見て取る眼がなかったら祖録は面白くもなんともない代物です。体験者はみんな手に取るように分かるから、この出会いの凄さが味わえるのです。烏臼屈棒といって碧巖に出てきます。ごらんになってみてください。ただし坐禅をしてないものには決して齒の立つ代物じゃないんです。大いに坐禅をした眼で読んでみてください。とても面白いんです。

ここに出してきた理由は、警策というものがこういう風に痛快に使われておるということです。禅堂で叩くだけじゃないということです。

この度、息子が首座法戦式をするに当たって、お祝いに来られた方へ記念として差し上げるべく、私自身がその警策を作っています。それに因みまして警策の因縁を聞解の形で纏めたものです。

もし警策を手にすることがありましたら、祖師方の力量が警策をどれほど生き活きとさせていたかを感じてください。そして自分も斯く成りたいと願心を高め、そのためには更なる菩提心があるのだと自らを策励してください。

高瀬氏：徳山のいい得るも三十棒、いい得ざるも三十棒とありますが、これはどうなんですか

老 師：徳山という方は仏教学者でして、秀才だったんです。純粹で情熱的な性格のうえに、向こう意気も強かったし何より根っからまじめな方でした。金剛經という經典を得意としあっちこっち講義をして回っていたのです。南方に禅というものが流行っておると聞き、怪しげな宗教を俺が行ってそれらを捻りつぶしてやろう、いさみこんでやってきたんです。お腹かも空いた頃、ある茶屋を見つけて背負っておった書物を下ろして、餅とお茶を頼みました。出てきた餅を徳山がつまんで正に食べようとした時に、そのの婆婆が尋ねたのです。先生が担いできた物はいったい何ですかと。徳山は、金剛經というお経の本で、それをわしが講義してあちこち廻っているのじゃと。ところがその婆婆が曲者だったんです。いや、徳山を徳山たらしめるための好因縁になった人なのです。婆婆曰く、金剛經というお経の中には、過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得とありまするな。そこで先生はどの心でその餅をお食べになるんですか？ と好一問を喰らわしたのです。すかさずやられて、口元まで来た餅を徳山はこの一問で食べられなくなってしまったのです。概念上の人の限界がよく分かるでしょう。どの心で食べるんか？ あなたならどうしますか。

高瀬氏：只食べちゃいますね。

老 師：あははは。今ならそれができる、貴方にはもうその力があるから。でも徳山はそ

れがなかったものだから、言葉の学者ですから婆婆に言われた言葉に引っかかって動きがとれなくなりました。でも徳山は真面目で素直な人ですから直ぐに尋ねた。貴女のその見識はどこで得たのですかと。そこが徳山の偉いところです。婆婆が言うに、この先に龍潭という偉い老師がおられて、自分もその老師に就いて参禅をしておるんだと。

それを聞いて徳山は餅を食べるのも忘れて龍潭のところへ行っただけです。学者ですから龍潭と出会うや理屈でああいえばこう言い、こう言えばああ言う。どうも昼寝していた時間に訪れてから、真っ暗になっても尚していたのですから、かなりの時間です。それで龍潭も疲れたので、もう遅いからあっち行って休め、というてようやく終わったのです。そう言われたらしょうがないから、徳山もじゃあ失礼しますと言って部屋を出てみたら真っ暗だったのです。暗くてさっぱり分かりませんと龍潭に訴えると、おおそうそれは危ないなと言うわけで、和紙をくるくると捻って棒状にし、油へ突っ込んで火をともし、即席の代用ローソクになる。それを徳山が受け取った瞬間、龍潭が吹き消したのです。こうした手段を活策略（かつさりやく）と言いますが、相手の出方を見ることにより、更なる手段へと繋いで導くのです。

真っ暗になった途端に今まで担ぎ回ってきた理屈がストンと落ちたんです。悟ったんです。こうした縁でいきなり悟るのを頓悟と言います。吹き消す事と、真っ暗く成ることと、悟ることとの関係性は何も無いのです。その時、法縁が熟したとしか言えないのです。真面目で一本気で一途に突き進み、その他に何も無いところまで単純化していたから隔てが落ちたのです。ですから必ずしもそれらの縁でなくても、早晚ぶち抜いたはずですが、但し、龍潭禅師に出会えたからのことで、正師に遇わずして法縁が熟すことは殆どありません。とにかく婆婆にやられて、龍潭に出会って、真っ暗になっただけで悟った早さと勢いがあるものだから、荒々しいけれども法縁は強烈な方が熟し易いとでも思っていたようです。苦心して、苦心して、苦心して悟ったものじゃないでしょう。本来が真面目で純粹だったから心の癖も簡潔なのです。だからけりが付くのも簡潔だったんです。そんな彼にしてみると、悟ることは簡単なことだと理解しているはずですが。

だから自信力に加えて簡潔にいった体験から荒っぽい手段で悟らせようとしたのです。仏法とは何ぞやと問えば、ぼかぼかぼかと殴る。是れその物だ、とすることを本当に知れば良いのですから、それを知らせるにはその物を浴びせかけるばかりです。それが徳山流です。それで徳山は棒使いの名人ということになったのです。

とても有名な人で、この徳山の門下から雪峰、巖頭などの禅師が多数輩出しています。雪峰禅師は大衆常に千七百人いたほどの人物です。そういう弟子を作りだした背景に、警策があったことはとても面白いですね。坐禅と警策が存分に活用されたお陰で、どれだけ多くの方が悟ったかわからないのです。ということでもあります。

平山氏：今の話しですけれども当時何千人もいたということは書物を通して知ってたんですが、これは文章上のことかなと思っていました。今禅の命脈は日本だけにしかなく、しかもほんの数人しかいないと言うことですが、その時代そんなに禅が流行っていたとしたら何らかの浄化作用となったはずですが。それで世の中がどれくらい変わったのでしょうか。
老 師：それは色んな角度から検証して、これから学者が具体的な数値にして成果を明らかにしていく時がくると思います。

ただ日本においてもですね、少林窟が所在しておる勝運寺に、雲水が七十六人と半人おつ

たというんです。二百年くらい前にです。ですから日本においても勝運寺くらいのお寺に七十幾人も雲水がいたということは、いかに世の中が乱れてて子沢山で、そして食べ物もなくて、お寺へ入れておけば何とかかなると言う、社会のクッション的存在と同時に教育機関としての役割を果たしていたようです。

禅だからと言うよりお寺という存在は、例え葬式にせよ法事にせよ、それを厳粛に行うために親族知人等が集まり、心を寄せ合って悲しみや苦しみを、信仰という形で諦めと消滅の方向へ導いていたことは確かです。又、高度な精神文化を有する名僧が次々に現れて、専門家教育機関としての成果も上がり、そこで修行してお坊さんが育ちました。全国にお寺が建ち住職が地域教育者として人間の道を教えていったのです。社会へ与えていった影響と言うより、お寺は社会を支える人作りをしていたという方が自然かも知れません。

革命続きの国の中国においても当然その様な様子はあったと思われまます。安全な処としてはお寺しかなかったはずですから。中国の特徴としては別口があります。四書五経を元として発達した諸子百家の思想乱立は、成熟期に入って低迷し陳腐化しつつあったところへ、仏経が入りやがて禅が伝わって新しい息吹となったのです。相変わらず戦乱の繰り返してはあっても、仏教文化を発達させたと言うことは、それだけ平和への具体的渴望となり救いとなっていたのです。日本と同じように矢張り高官も多数参禅し、大乘精神を元に政策を施行した人も居たようです。しかし、こうした精神文化というものが一般化するためには、戦乱という血なまぐさい環境では難しいことは確かです。又、豊になり過ぎて緊張感を必要としない環境も、努力心を大きく後退させるようです。

大勢集まっているから盛んであり熱心だとは言えません。法は正にして盛に非ずです。

平山氏：それで私の疑問はその時代は今より人工が少ないですよ。それで相対的にはお坊さんの数が圧倒的に多いわけですよ。現代はお坊さんの数は圧倒的に少ないですよ。ですから昔はすばらしいお坊さんと言いますか、先生役が多かったし、単純に考えると今よりすばらしい世の中であつたらうという疑問があるんです。

老 師：日本では明らかに聖徳太子から国分寺がどんどん建てられ、各地に教育機関としての寺が生まれて、大勢の人がそこで育てられました。それらが今の日本民族の精神性の元になったと言えるんです。しかし出家者が圧倒的に多く、又優れた指導者が居たからと言っても、背景である社会が個人の意志と自由を奪った封建社会においては、基本的に今より素晴らしい訳がないのです。

封建時代でいうなら、他国に比べると日本は圧倒的にいい状態でした。それは聖徳太子によって大乘精神を早く国策に取り入れて、健全な律令政治を立ち上げたからです。政変を繰り返しながらも、人間性の中心を育てられたのは、そうした基盤を消化し血肉にした日本人自身の本来があつたからです。その源は自然をベースにした農耕民族であつたことに由来するのです。それは如何なる結果にせよ、自然には逆らえないために受け身姿勢となり、それが自然の総てに畏懼と畏敬と感謝の念へと発展し、その大切な心を育て続けて来たからです。ですが如何せん封建社会にあつては、荒々しい政変のために、貧しい民はただ生きるための努力で精一杯です。ですが諦めるという心的処置術で平安を獲得していましたが、それこそ仏法の力、住職方の社会教育の成果だつたと言えましょう。

結局は大切なものを伝統的に繋いでいく人を育てるか否かでしょう。禅と人間づくりと国策、精神性というのは内的なもの、つまり心の発露ですから、これを如何に大事にするか、

如何にして育てるかです。頂点の人達がこの意識を失ったとたんに暴力的な社会となり、別な方向に流れて変質する。その変質の姿が今の中国であり、中国に禅が無くなった理由です。日本に残った理由は、最も自然的で受容的な精神基盤によるものです。

平山氏：で日本も少ないと。現実も平和ではありながらある意味では平和でもない。現在日本にしか残っていないその禅の命脈ですが、それも大悟徹底した人は非常に少ないとなると、それは大変な時代だなと思います。

老 師：大変なことです。しかも日本は宗教家の社会的評価というものが地に落ちてしまいましたので、お坊さんが世の指導者的な存在だと誰も思ってませんし、社会的扱いが全くありません。だから若い人たちが本当に修行しようとする気が起こらなくなったのです。国際会議などで外国へいきますと、神父さんに対しても質を問わず、聖職者として必ず会議の真ん中に位置します。ところが日本での会議となると、私は常に片隅です。誰を中心に置くのかと言うと、時の社会的な勢力者か名の通った学者が中心です。こうした傾向である限り、普遍的な内面の重大性を第一にすることは絶対にありません。ですから求心力がありませんので、単なる理屈の披瀝から超えることはなく、本質に向かうことはありません。本人達はその人の集まりですから満足しているようです。

ああ、これはもう日本はだめだなと。どんな偉大な宗教家が出てきてもそれを活かす人も無く、時所位も無く、それを求める精神も無く、尊敬心も世間事の下であり、その程度でしか無いからです。

平山氏：少なくとも歴史上は、禅僧に対して公家や武家が教師とし先導者として尊敬し接していましたね。いまは全くそういうことがないですね。これでいいのでしょうか。

老 師：平等社会は人格を基準にして横並びにしますから、その意味では公平です。だが、重要な何かを育て継続していく場合には、一般社会と国家しか有りませんので、横並びの社会構造と言いますか水平構造では、そうしたことを引き上げ育てることは機構的には不可能です。従って水平社会である日本では、精神性が育ちにくいために、将来はこの大法が定着することはないでしょう。

こういう平等社会を悪平等というのです。何となれば、精神の退廃が社会を不浄にし不安定要素をなし崩しに増大していき、国家を危うくしてしまうからです。お金と権威しか価値を認めない体制へと進むばかりです。せっかく修行をして力量を備えても、こうした日本ではそれを活かす地場も、精神的教養を学ぼうとする向上心も失せて無いため、社会的にも時代的にも縁が無くなっているのです。ただ細々と命脈を繋げていくしかないですね。しかし地球が狭くなった今、総てがリアルタイムで全世界が振動する状態で、それが好い方向ではないために、この大乘精神の普及を急がねば成りません。それがこれからの私に課せられたやらねばならんことです。まあ縁のものですから・・・ 時節に従うしか有りませんね。

時節と言えば、湛念さん久しぶりですね。ちょっとお話をお聞きしたいですね。

湛念禅哲：半年ぶりに参りました湛念です。昨年十月老師にお世話になりまして、一週間参禅させていただきました。今回参りましたのは、私自身出家して十四年になるんですが菩提心が萎えてきたので、またみなさんから菩提心を頂戴したいと思ひまして今日来させていただきました。お陰様で明日からまたやる気ができました。みなさんどうもありがとうございました。

平成十三年十月二十日

以 上